

校長室より

二松学舎大学附属高等学校
校長 鶴飼敦之

「二松から飛翔へ」

自分の名前の由来は？ ～自己紹介の時期です～

年度初めに地元の役所に行って住民票をもらってきました。請求するためには当然ながら、申請書を書かなければなりません。氏名・住所・連絡先・・・と。そこで、過去に何回自分の名前を書いてきたのだろう、数えきれないなぁと、つくづく感じました。これまで当然のように使ってきた名前ですが、4月には自己紹介をする機会も多いでしょう。改めて名前について考えてみました。

私は自分の名前を紹介するとき、とっても苦勞します。まず、苗字からハードルがあり、“鶴飼”は「長良川のうかい（鶴飼）」という説明から始めます。すぐに通じればいいのですが、ピンとこない方には、「弟に鳥と書いて鶴、食偏に司と書いて飼です」と漢字の説明をしてみます。続いて下の名前は、まず“敦”が厄介です。以前は、「中国の敦煌（地名でトンコウと読みます）のトン（敦）です」とか「平家物語にも登場する平氏の武士の平敦盛のアツ（敦）です」などと説明するも中々通じず、しばし沈黙の時間が生じます。最後は漢字を分解して説明することに・・・これがまた面倒。でもここ何年かは「前田敦子の敦です」これで一発OKとなりました。つくづくAKBは凄いなぁと感心します。続いて“之”は“これ”、〇〇之墓の之（の）というやつです」でようやく名前の紹介が終わります。なんとも厄介な名前を付けてくれたものだと思います。

自分の名前の由来を親からきちんと聞いたのは小学校高学年の時だったでしょうか。授業で自分の名前の由来について、作文を書きましょうというものが課せられました。その時、自分の名前、漢字に込められた想いを知ることになったのです。幼い私には、概念的なところまでは理解できなかったけれど、幼いながらに、この名前を裏切るような生き方はできないな、したくないなと、感じたことを覚えています。もっと深いところにある、言葉の意味とか概念とか、漢字の成り立ちなどのバックグラウンドを知るのはもっと後の話ですが。よくぞこんないい名前を両親はつけてくれたなー、と年を経るごとに感心します。だからこそ、私は自分の名前にとっても誇りをもっているし、誇りがもてる名前を授けてもらったことにとっても感謝しています。

キラキラネームで独創的な名前の持ち主も多くいます。でも、ご両親が「世界にひとつだけの名前をプレゼントしたい」と、真剣に子どものことを考えて付けた名前でもありますよね。自分の名前の由来や意味を心に留めてください。親って本当にありがたいですね。

4月の気候 「玄鳥至」

この時期に異常な暑さが到来しました。4月なのに夏日とは。太平洋側の高気圧とその外側を流れる温暖な風、そしてフェーン現象が日本全体に暑さをもたらしたようです。新しい年度がスタートして、まだ身体の準備も万全ではない状態ではこたえるかもしれませんね。

さて、我々が感じる季節は「春夏秋冬」の四季ですが、季節をさらに分割すると「二十四節気、七十二候」に細かく分けることが出来るそうです。二十四節気とは地球に届く太陽の光量に関わる暦で春夏秋冬がそれぞれ6つに分けられ、季節に相応しい名が付けられています。季節の訪れを一步先んじて察知することができ、農耕作業をすすめるためには今も欠かすことのできない暦です。よく知っているのが「立春」や「冬至」など。七十二候とは、二十四節気を約5日ごとに分けたものだそう。それぞれの季節時点に応じた自然現象や動植物の行動を表現しているそうです。

通勤の朝、バス待ちの時間に空を見上げると、首の周りに赤いマフラーを巻いた鳥を見ました。今年もツバメがやってきたようです。「玄鳥至（つばめきたる）」も七十二候のうちの一つです。

